

うなぎ

映画文学人生論

原作：吉村昭「闇にひらめく」(1989)年「仮釈放」(1988年)
監督：今村昌平 (1997年) 脚本：富川元文 天願大介
出演：山下拓郎 役所広司 今村昌平
服部桂子 清水美沙 撮影：小松原茂
高田重吉 佐藤允 音楽：池部晋一郎
高崎保 柄本明

うなぎが旅をするのを知っていますか

今村昌平監督の映画『うなぎ』に感動させられた。うなぎは産卵のために二千キロも旅をするという。それは自然の驚異としてすごいことだが、感動したのはそのことではない。

主人公の山下（役所広司）がウナギを川に放してやり、おれもようやくおまえと同じになったと語りかける場面で感動したのである。私ももつと素直になり、うなぎのような生き方を学ぶ必要があると思った。

山下は妻の不倫の現場を目撃して、妻を殺し、警察に自首した男だ。仮釈放で社会復帰し、理髪店を開業していたが、やがて、他の男のタネを宿した桂子（清水美沙）との結婚を決意する。「どこの誰かもわからない男の子を育てるんだ」「生まれたい子はだいにしなくちやな」という。吉村昭の原作『闇にひらめく』や『仮釈放』にはそんな場面はない。監督・脚本家の創作だろう。

創作には狂気の要素がみとめられる。今村昌平の履歴書『映画は狂気の旅である』には「映画作りとはまことに割の悪い仕事である。金儲けなどとは無縁。自慢ではないが私はほとんど借金で暮らしている。いまだに千万クラスの借金があり、死ぬまでに返済できるかどうか」とある。

そんな割の悪い仕事に映画監督を駆り立てるものは何か。狂気である。産卵のために二千キロも旅をするうなぎのような狂気だ。



うなぎ———映画文学人生論

「どうしてうなぎを飼っているのですか」
「うなぎがおれに似合っているからだ」
「なんでウナギなんだ」
「話を聞いてくれるのです」

映画『うなぎ』は一九九七年のカンヌ国際映画祭でグランプリ（パルムドール）を受賞したが、今村は賞に値する作品だとは思っていなかった。撮り直しをしたい箇所があるが、予算の都合で断念せざるをえず、内心鬱々としたという。

監督の自己評価と審査員の評価とがズレているが、一般の観客の評価とのズレはさらに大きい。今村が自信をもって世に問うた映画、たとえば、『豚と軍艦』や『ええじゃないか』は興行的には失敗作だった。路上にあふれた千頭の豚にやくざが喰い殺されるとか、橋の上で女郎衆が鉄砲隊に向かつて一斉に尻を突き出し、おしっこをするという奇想天外なアイデアは観客に受けなかった。奇を好む傾向のある私でも面白いとは思はない。しかし、今村は『うなぎ』だけでなく『楳山節考』と『黒い雨』でもカンヌ映画祭でグランプリを獲得した。その三作に加えて、『にっぽん昆虫記』『神々の深き欲望』『復讐するは我にあり』はキネマ旬報の評価で年度別ランキング第一位。その実績は小津や黒澤と比べても遜色はない。

大鰻おれの話聞いてくれ